

2024

11

ナイル

現代短歌ナイル

ナイルキャンパス／五代目神田伯梅

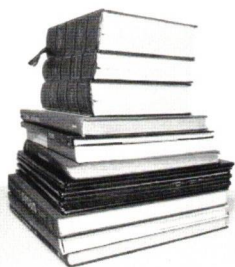
芙貴子ワールド／松本芙貴子

偶然の糸を遊ぶ【5】

9月号作品批評／宮本史一（心の花）

SEIEI（晴詠）を読む／小村井敏子

高校生短歌特集【2】



NILE CAMPUS

305

伯梅閑話 — 和服禁止 —

小村井敏子（五代目神田伯梅）

六代目神田伯龍と一緒にあったとき、いくつか、これはやらないうにと言われたことがある。一つは、「納豆を食べないように」。料理屋の家庭の食卓に、納豆はなかったようだ。料理屋で、原価が安く高値で売れるのは、ぬか漬。ぬか漬もなかったようだ。伯龍はぬか漬を食べられなかった。だが、私のぬか床を伯龍が管理した。納豆は、時々、食べさせてくれた。もう一つは、「煙草を吸わないように」。これは、元々、煙草を吸う習慣はなかったたので問題なく守れたのだが、時々、伯龍の言いつけを破りたくなって、数回もらい煙草をした。伯龍に禁止されたとき、「なぜ？」と聞いたことはない。できもしないことを言われたことはなく、あれこれ言われるのを嫌う伯龍だからだ。

毎日、洗濯をし、台所は、伯龍のテリトリ。私は何もしないことを求められた。夫である伯龍の講談の宣伝もさせてもらえなかった。周囲で、ばたばた動くのはため。現在の家も、探し回ることなく、借りてくれと言われて借り、売ると言われて買った。あれこれ、探し回るのはためなのだ。言われたら、言われた通りにした。「着物を着ないように」と言われたときも、「なぜ？」とは聞かなかった。終戦の年に、徴兵されたとき以外、生涯、和服しか着なかった人だ。伯龍にとつて、和服より、洋服の方がよく見えたのかもしれないし、洋服の方が、洗濯しやすいからだったかもしれない。言われた私は、中学生の頃から、着物が着たくて、普段着は母の縫った着物だった。お太鼓をさつと結んでいた。伯龍に言われて、外出時に着なくなつて、二十年近く、お太鼓を結ばなかった。夫が亡くなつて、さあ、着物を着てもいいと思つたとき、お太鼓が結ばなくなつていた。長襦袢を着るのも面倒。今どきの着方になつて、洋服の上に着物を着ることになった。足元は靴だ。足元が衰える年齢になつてゐる。転ばぬためにも靴がいい。男物ならおはしよりがない。父の着物を着て歩いたこともある。夫の着物がちょうどよかった。